

理想化されたアフリカ

— 映画『ブラックパンサー』に見るアフロフューチャリズムとステレオタイプ —

Idealized Africa: Afrofuturism and Stereotypes in *Black Panther*

朴 珣 英

PARK Soonyoung

序論

アメリカの黒人にとってアフリカ大陸は、世代交代を繰り返し、もはや自身の祖先の正確な出身地を特定できなくなった彼らの「理想の地」としてしばしば想像されてきた。過酷な奴隷制度の下で、あるいは奴隷制廃止後の人種差別の下で、アメリカでの望ましい未来を描くことが困難であった状況の中、アフリカを「祖先の地」として極端に理想化したアフリカへの志向が19世紀、20世紀を通じて一定数のアフリカ系の人々を惹きつけてきた。Martin R. DelanyやMarcus Garvey等ブラック・ナショナリストに代表されるBack to Africa Movement（アフリカ帰還運動）が容易に想起される。しかしながら、19世紀アメリカにおける奴隷制廃止運動および黒人解放運動の代表的な黒人指導者の一人であるFrederick Douglassがいみじくも指摘したように、アメリカの人種問題の解決策として「アフリカ帰還」を称揚することは根本的な問題解決にはならないのである。なぜならアメリカの黒人は、アメリカ合衆国建国以前から文字通り血と涙をもってアメリカの発展に寄与してきた「アメリカ人」に他ならないからである¹。

また、「想像のアフリカ」はあたかもアフリカ大陸に全体的で単一的な共通の文化遺産が存在するような幻想でしかなく、本来多様であるアフリカ大陸の民族や文化の在り方を神話的理想へと平板化するものである（Wright 46-47）。そもそも、アメリカの黒人のアフリカ帰還事業は、1816年に設立された白人主導によるAmerican Colonization Society（アメリカ植民協会）の「アフリカ帰還計画」に端を発するものであった²。同協会は黒人奴隷制度には反対するものの、すでに自由の身、あるいは解放後の黒人と白人とのアメリカ合衆国での共生は不可能であるとの人種主義に基づく偏見から、自由黒人をアフリカへ実質的には「送還」というものであった。黒人を「他者」として排除する白人と、アメリカの白人主流社会における「他者」として自己を規定せざるを得ない黒人が、「本来いるべき場所」として最終的に志向する「理想」の土地が「アフリカ」なのである。

2018年2月公開のハリウッド映画*Black Panther*³は、まさに理想化された「想像のアフリカ」を前面に押し出した作品であると言えよう。キャラクターとしてのブラックパンサーは、ブラックナショナリズムを掲げた急進的政治組織であるBlack Panther Partyの結成より先立つこと数か月、1966年に脚本Stan Lee、作画Jack Kirbyの二人のユダヤ系白人アーティストによって制作されたMarvel Comicsの*Fantastic Four*第52話に初登場する黒人スーパーヒーローである。そ

の後、同コミックスは90年代、2000年代に単独タイトル作品*Black Panther*として制作者を変更しつつシリーズ化され、2010年代にはノーベル賞作家Toni Morrisonが次世代を代表する気鋭の作家と評価し、全米図書賞も受賞しているアフリカ系アメリカ人作家Ta-Nehisi Coatesが脚本を担当している⁴。

映画『ブラックパンサー』は、アフリカ大陸内陸部の東部にあるとされる架空の王国Wakandaを舞台とする。ワカンダは唯一自国のみで産出する鉱物vibranium（ヴィブラニウム）を利用して、地球上類を見ない高度な文明を有している。最先端の科学技術を誇りながらも、資源を目的とする植民地化を防ぐため、農業以外に主要産業のない貧しい国を偽装している。そのため一度も西洋諸国から植民地化されたことがないという歴史的背景を持ち、5つの“tribe”（「部族」）がそれぞれ先祖代々の伝統的な生活を守っている。いわば伝統と科学技術が融和した文明社会を形成しているのである。そして特殊な薬草を摂取することで増幅された超人的な身体能力を備えた代々の王が、ヴィブラニウムを用いた特殊スーツを身に着け、スーパーヒーロー「ブラックパンサー」としてワカンダを統治している。コミックスにおけるワカンダの描写にも、“Though the Wakanda tribe lives in the tradition of their forefathers, they possess modern, super-scientific wonders we can only marvel at!” や “They are not the ordinary native tribe they seem to be!” といった台詞とともに、ファンタスティックフォーのメンバーを歓迎する「アフリカの」舞いが披露されている場面がある⁵ (26)。ワカンダを「部族」社会として捉えるこの初期設定における「アフリカ」への眼差しこそが、ヨーロッパ中心主義思想を如実に表していると考えられる。現実の歴史においてアフリカ大陸を植民地化するにあたり利用されたのが、アフリカには文明が存在しないという「暗黒大陸」言説であった。「未開」であるはずのアフリカに超文明が存在するという「意外性」は、「アフリカにはそもそも文明が存在しない」といった歪んだ大前提が制作者と読者双方にあってこそ成立するのである。

公民権運動期から約半世紀を経て「黒人」大統領Barack Obamaが誕生したが、その一方でアメリカにおける人種の問題は好転しなかった。さらには排外主義的な主張を唱えるDonald Trumpが大統領に就任し、人種をめぐる状況はより複雑化した。そうした状況のなかで、ハリウッドは近年、黒人の存在が際立つ作品—*The Butler* (2013), *Twelve Years a Slave* (2013), *Hidden Figures* (2016), *Moonlight* (2017), *Get Out* (2017), *BlackKlansman* (2018) 等—を作り出している。その流れの中に『ブラックパンサー』も位置付けられる。脚本及び監督をアフリカ系アメリカ人のRyan Cooglerが務め、主役のみならず出演者の大半、そして製作陣の多くが様々な国籍や出身地を背景に持つアフリカ系の人々で占められており、ヨーロッパ中心的、白人中心的視点を回避しようとする姿勢が随所に見受けられる⁶。しかしながら、本作品は白人中心主義的コロニアリズムを批判し、対抗しようとする側面を有しながらも、そのコロニアリズムを囚えずも再生産し、アフリカ大陸のみならずアフリカ系アメリカ人自身をもステレオタイプ化する陥穽から逃れられていない。本稿はアフリカ系アメリカ人にとっての「理想化されたアフリカ」に注意を払いつつ、映画『ブラックパンサー』におけるコロニアリズムや人種主義への対抗言説としてのAfrofuturism（アフロフューチャリズム）とステレオタイプの問題を論じるものである。

1. 対抗言説としてのアフロフューチャリズム

アフロフューチャリズムとは、アフリカ系アメリカ人が創り出した文化的伝統、芸術運動の一つと言える。文学作品や劇画、コミックス、ポップミュージックなどのジャンルにおいて科学技術と関連するSFファンタジーを採用し、宇宙あるいは宇宙的広がり（普遍性）を志向するものである。宇宙を希求するその態度は、すなわち故郷・家（ホーム）を希求するそれと同じ意味を持つ。このような言説の背後には、約250年間続いた奴隷制度とその後の人種隔離政策、公民権運動後の巧妙化した差別体制、21世紀にも止まないracial profiling（人種プロファイリング）によるpolice brutality（警察による過剰暴力）の現実日々直面するアフリカ系アメリカ人の抱える不条理が存在する。すなわち、梶原克教の言葉を借りると「歴史＝現実が信じがたいまでに荒唐無稽で不条理ならば、その現実自体がファンタジー」（332）なのであり、一見現実離れしているように見えるSFファンタジーがアフリカ系アメリカ人の現実と極めて高い親和性を持つのである。奴隷制時代であれば白人の意のままに売買され、文字通り生殺与奪の権利を白人に握られており、21世紀の現代であれば、自分の国（ホーム）にいながら肌の色が「黒い」というだけで、射殺される現実、いつの時代も黒人の命が軽視される状況（Black lives do not matter）ほど、“hyperreal”（「超現実的」）で不条理なことはないのである⁷。

『ブラックパンサー』が他のスーパーヒーローアクション映画と決定的に異なるのは、物語が宇宙からの異星人の侵略であるとか、狂気じみた悪者が世界征服を企むといったものではない点にある。アフリカ系アメリカ人のジャーナリストJelani Cobbは“[The film is] about the implications of a version of Western domination that has been with us so long that it has become as ambient as the air”と指摘する。つまり、かつて一度も西洋諸国から植民地化されたことがないという歴史を持つワカンダという架空の王国は、現実の世界において植民地化され、支配され、搾取されてきたアフリカ諸国への“redemptive counter-mythology”（Cobb）なのである。すなわち、ワカンダは白人の影響が一切介在しない、あるいは白人の想像力を超越する黒人主体のAfrofuturistic utopiaとして描かれているのである。歴史上常に独立を保ち、高度な文明を持つワカンダは、大西洋奴隷貿易によって先祖の地から遠く離れたアフリカ系アメリカ人にとって理想的な「想像のアフリカ」と言えよう。まさに“Africa as a dream of our [black American’s] wholeness, greatness and self-realization”（Wallace）なのである。また、ケニアの政治学者Peter Kagwanjaは次のように指摘する。

Black Panther exudes with the 21st century afro-optimism and imaginations of an African continent rising. It heralds “an historic opportunity to depict a black superhero” at a grave moment when African-Americans and African immigrants are facing vilification and dehumanization across the post-liberal West, but also powerfully affirming their identities.

現在のアメリカの人種主義的ポピュリズムやヨーロッパの孤立主義に対峙するアフリカ系の人々の楽観主義を『ブラックパンサー』に見て取るのである。すなわち、映画の中のワカンダは、現在のアフリカ諸国の多くが直面している政治的、経済的、社会的、文化的挑戦を乗り越えるフィクションとして理想的に描き出されていると言えよう。

このような「理想のアフリカ」であるワカンダが描かれる本映画においては、コロニアリズムが前景化され、反転した形で提示される。ワカンダの先の王T'Chakaの弟N'Jobuを父に、アフリカ系アメリカ人女性を母にもつErik “Killmonger” Stevens (ワカンダ名N'Jadaka) がMuseum of Great Britainを訪れるシーンでは、アフリカの展示室で彼と白人学芸員の会話が展開する。エリックは展示物の一つ一つをどこのものかと学芸員に尋ね、学芸員はやや高慢な態度でそれに応じる。そしてある展示物の前でエリックがこれはワカンダのものだから返してもらおう、と述べる。気分を害した学芸員が、これは売り物ではないと答えると、エリックは次のように切り返す。

Scene: [00:16:38-00:16:42]

How do you think you ancestors got there?

You think they paid a fair price?

Or did they take it, like they took everything else?

映画の中の博物館Museum of Great Britainが実在のBritish Museumを示すことは明らかであり、大英博物館の所蔵品の中には旧植民地などからの収奪品が多く収められているという事実が直ちに想起されるシーンとなっている。さらにエリックの台詞にはアフリカ大陸を植民地化し、支配し、搾取してきたヨーロッパ諸国のコロニアリズムへの痛烈な批判が込められている。

また、南アフリカを拠点とする白人武器密輸商人のUlysses Klaueは、“human embodiment of colonialism”(Marshall)として意図的に作られた登場人物である。彼のあからさまな人種主義は、“You [black] savages didn't deserve it”(00:53:22)や“‘They [black people] are savages’”(1:03:16)といった台詞に如実にうかがえる。コロニアリズムの根底には、支配する対象を他者化し、「野蛮人」として非人間化する思考のメカニズムが存在する。映画の観客が決して共感しえないような私利私欲にまみれた残虐な人間として人種差別主義者クロウを表象することで、コロニアリズムの本質を提示し、正当化の可能性を排除していると言えよう。

さらに、アフロフューチャリスティックなワカンダにおいては、ジェンダーの平等性が意識され、女性のリーダーシップに関しても肯定的に描かれている。アフリカ系の女優たちが演じる主要登場人物のワカンダ女性は皆、聡明で、自立心に富み、勇敢である。さらには、決して男性の愛を得るために美を競ったりはしないし、極端な性的魅力を付与されてはいない⁸。

また、主要登場人物の中で唯一の白人であるCIAのエージェントEverett Rossとワカンダの女性とのやり取りも、コロニアリズムへの批判が見られる。国王T'Challaと国王を護衛する女性のみで結成された精鋭部隊Dora Milajeを率いる将軍Okoyeの会話がワカンダの公用語とみられるXhosa(コサ語)⁹で行われている場面に居合わせたロスは、ティチャラに“Does she speak English?”と尋ね、オコエから直接“‘When she wants to’”(00:54:56)と切り返され、気まずい思いをする。英語帝国主義的態度を揶揄したシーンと言えよう。ケニアのジャーナリストLarry Madowoは、植民地化を経験したが故のアフリカの言語状況とアイデンティティの問題を次のように述べる。“We call ourselves Francophone Africa versus Anglophone Africa. We [Kenyans] categorize ourselves based on who our oppressor was. I always find that a strange thing. Our identity is

so deeply tied to our oppression” (qtd. Marshall). オコエの態度は実際に植民地化を経験し、現在もその負の遺産に影響を受けざるを得ないアフリカの現状を反転させてみせるのである。

王妹であり天才科学者の Shuri は、最高の科学技術と医療技術をもって瀕死の状態にあったロスを救う。昏睡状態から目覚め、シュリの背後にやってきたロスに対して彼女が放った“Don’t scare me like that, colonizer!” (1:09:23) という台詞は注目に値する。この映画が批判するコロニアリズムの思想において、colonizer すなわち侵略者＝白人であるということは、黒人への優越性を示す指標であるはずのものである。しかし、シュリはその白人の抱える優越感を、自らが命を救った白人への軽口として放つことで人種間の優越性を反転させているのである。

2. ステレオタイプのアフリカ表象とネオコロニアリズム

ワカンダを Afrofuturistic utopia として描き出す映画『ブラックパンサー』には、前節で取り上げたように、白人中心主義的コロニアリズムを批判し、それに対抗しようとする姿勢が部分的には読み取れる。しかしながらその一方で、ケニアのジャーナリスト Patrick Gathara が指摘するように、“neocolonial vision of Africa”が読み取れるのである。その際に、映画における以下の設定が問題となる。ワカンダの高度な文明や科学技術は偶然宇宙から飛来した隕石に含有されていたヴィブラニウムによるもので、ワカンダ人自身によって生み出されたものではない。映画の冒頭に“five tribes settled on it and call it Wakanda” (00:00:32) とあるように、ワカンダは5つの「部族」からなる「部族国家」で、封建的でエリート主義の一部の王族が支配している。国王となるブラックパンサーの力は、超人的な力を与える薬草を摂取することで得ることができ、ヴィブラニウム製のボディスーツによって強化される。したがって厳密にいうと本人の能力ではないと言える。高度な文明を誇りとするにも拘わらず、命がけの決闘もしくはクーデター以外の方法での支配権の継承が考案されていない。5つの「部族」から形成されているはずなのに、ワカンダ固有とおぼしき言語はコサ語のみで、「アフリカの」訛りのある英語を話す。以上のような設定を考慮することなく、本映画を一面的に評価するわけにはいかないのである。

ガタラは上記の点に着目し、“The Afrofuturism of black America … has little to offer the people of Africa”と批判し、その問題点を次のように明確化する。

“Black Panther” may be a rare feel-good movie for black folks in America, but it should not be mistaken for an attempt at liberating Africa from Europe. Quite the opposite. Its “redemptive counter-mythology” entrenches the tropes that have been used to dehumanize Africans for centuries. The Wakandans, for all their technological progress, still cleanly fit into the Western molds, a dark people in a dark continent.

すなわち、『ブラックパンサー』の設定はアメリカ黒人がまさに長らく抑圧され搾取されてきた背景にある人種主義や西洋中心主義から生じたアフリカ観を投影してしまっているのである。同様に、Malawi 出身の著名な歴史学者 Paul Tiyambe Zeleza は、『ブラックパンサー』における“the pervasive tropes of colonial discourse that frame the film despite its eagerness to invoke a progressive Pan-African aesthetic”に非常に困惑したと述べる。ゼレザはワカンダが“tribal”

nation-state”と設定された点について敢えてイタリック体を用いて強調し、“*The term ‘tribe’ is the ‘N’ word of colonial denigration for African societies. There is nothing authentic or liberating about referring to African communities as ‘tribal,’ a term that evokes atavistic identities and primordial politics*”と、強く批判する。ゼレザは、ワカンダを構成する5つの「部族」表象は、西洋中心主義的ステレオタイプにかなったもので、ヨーロッパ人が「暗黒大陸」で「発見」した *National Geographic* 的「原住民」のイメージの再生産でしかないと断じる。

アフリカ系アメリカ人ジャーナリストの Jessica Bennett は、1945年創刊で現在も発行中のアフリカ系アメリカ文化専門月刊誌 *Ebony* において“*How ‘Black Panther’ Dissects Tension Between Africans & African-Americans*”と題した記事で次のように指摘する。“*Of course, Africans know a great deal about colonization and imperialism, but to have one’s entire culture, language and traditions strategically expropriated over the course of multiple centuries is a bitter pill Black Americans have been forced to swallow for the sake of survival.*”¹⁰ 確かに、奴隷制時代から現代に至るまでの苦難の歴史を通して、アフリカ系アメリカ人は自らの人間性と尊厳を *black culture* に結実させており、その結果アメリカ社会における黒人文化に対する *cultural exploitation* や *cultural appropriation* の問題が多くのアフリカ系アメリカ人を憤らせてきたこともまた事実である。しかしながら、アメリカ合衆国において政治的、経済的、社会的抑圧や文化的搾取を知るアフリカ系アメリカ人が、アフリカを文化的に搾取しており、自らを支配・消費してきたメカニズムを囚らずも再生産する形となっていることにもまた、注目すべきであろう。映画『ブラックパンサー』のアフリカは“*dangerously simplistic and homogenization of the continent [of Africa]*” (Zezeza) としてしか存在せず、現実のアフリカ大陸の民族や宗教も含めた文化の多様性は消し去られていると言えよう。そこに *Pan-Africanism* も *Black Diaspora* の姿勢も見出すことは困難であろう。*African American* は *American* であって *African* ではないのであり、グローバル経済の中でアメリカ・ヘゲモニーに加担することになってしまうのである。この点にネオコロニアリズムの問題が浮き彫りになると言えよう。

3. ステレオタイプのアメリカ黒人表象

映画『ブラックパンサー』におけるステレオタイプはアフリカだけではなく、主要登場人物中唯一のアフリカ系アメリカ人男性であるエリックの表象にも見られる。Johns Hopkins University の哲学者 Christopher Lebron は、“‘*Black Panther*’ Is Not the Movie We Deserve”と題した小論において、エリックの表象について“*shocking devaluation of black American men*”と指摘し、次のように述べる。

In 2018—in a world home to both the Movement for Black Lives and a president who identifies white supremacists as fine people—we are given a movie about black empowerment where the only redeemed blacks are African nobles. They safeguard virtue and goodness against the threat not of white Americans or Europeans, but a black American man, the most dangerous person in the world.

昨今の“Black Lives Matter”（「黒人の命も大事」）という社会運動の背景には、先述した奴隷制

時代にまでさかのぼる白人至上主義による黒人の生命の軽視がある。大統領がヘイトスピーチやヘイトクライムを誘発しかねない発言を繰り返すような現状に置かれているアメリカ黒人にとって、防弾スーツを身にまとったブラックパンサーはあまりにシュールなファンタジーであろう。

『ブラックパンサー』におけるアメリカ黒人表象において最も問題となるのは、エリックがカリフォルニア州オークランドのインナーシティにおける孤独と絶望から「怒れる黒人男性」として暴力に訴える戦闘的な人物として描かれている点である。そもそもエリックの父ウンジョブはスパイとしてワカンダからアメリカに派遣されていたのだが、アメリカ黒人の直面する深刻な状況に心を痛め、ヴィブラニウムの存在を秘匿し、主要産業のない貧しい国の偽装を続けるワカンダに対して懐疑的になる。そしてヴィブラニウムの軍事的利用を計画し、その行動も次第に過激化して行く。次のウンジョブの台詞にそれが反映されている。

Scene: [1:05:56-1:06:15]

The leaders have been assassinated. Communities flooded with drugs and weapons.

They are overly policed and incarcerated.

All over the planet...our people suffer because they don't have the tools to fight back.

With vibranium weapons, they could overthrow every country... Wakanda could rule them all the right way.

ウンジョブの言う“our people”は明らかにアメリカの黒人を指している。父親の死後、エリックは上記の言葉を内面化し、戦闘的な黒人男性へと成長する。特殊部隊の一員としてイランやアフガニスタン戦に従軍したエリックは「敵」を殺害するたびに身体に入れ墨を入れ、“Killmonger”（「殺し屋」）とあだ名されるまでになる。まさに“inner-city gangsterism”（Lebron）の一典型として描かれているのである。エリック＝キルモンガーは“*It's about two billion people all over the world that look like us. But their lives are a lot harder. Wakanda has the tools to liberate 'em all*”（1:14:28）と主張するが、ここで彼の言う“people that look like me”¹¹、すなわち自分と同じ肌の色をした人々の解放とは、Black Diaspora的連帯を志向するものである。世界の抑圧された人々を救済できる力があるにも拘わらず、他国からの干渉や植民地化を恐れて長年ヴィブラニウムの存在を隠し、孤立主義を貫いて世界に貢献してこなかったワカンダに対するエリックのこの憤りは、正当なものでさえある。エリックの憤りの背景にはW. E. B. Du Boisがかつて*The Souls of Black Folk*（1903）において指摘したアフリカ系アメリカ人の“double consciousness”（「二重意識」）が強く関わっている。すなわち、生まれ育ったアメリカが故郷（ホーム）であるにも拘わらず、白人至上主義社会から他者として扱われる疎外感の問題である。さらにエリックの置かれた状況においては、もう一つの二重意識が存在する。ワカンダ人でありながら、祖国ワカンダから存在しない者とみなされてきたことである。この二つの二重意識こそが映画『ブラックパンサー』において詳しく描かれるべきであったのではないか。

しかしながら、映画ではエリックの二重意識を発展させるのではなく、目的遂行のために彼が選んだ手段、すなわち反発する勢力をヴィブラニウムの力を用いた武力によって支配すると

いうことに焦点を当てる。“I know how colonizers think. We’re gonna use their strategy against ‘em” (1:30:19), “The sun will never set on the Wakandan empire” (1:30:46) といった発言から、従来のコロナリズムの内面化が伺え、ティチャラが主人公のこの映画ではエリックは気の毒でかわいそうな生い立ちのvillain (悪役) に成り下がるのである。結局エリックはティチャラとの一騎打ちの末、命を落とすことになる。レブロン の指摘する通り、“His [Erik’s] black life did not matter even in a world of flying cars and miracle medicine” でしかなく、黒人男性同士 (従兄弟同士) が殺しあうことでしか決着がつけられないといった描写は、まさに“black community’s inability to get it together” といったステレオタイプの再生産につながるのである。これでは、現在のアメリカ黒人の置かれた状況に対する counter narrative としてのアフロフューチャリズムが機能していないと言えよう。

結論

アフリカ系アメリカ人の歴史において、アメリカでの現実の厳しさに背を向けたくなる心情から、幻想を抱き、アメリカへの失望から逃れるため「理想化されたアフリカ」が生み出されてきたこと、あるいは生み出さざるを得なかったことは冒頭でも述べた通りである。エリックは自身のことを“Kid from Oakland, running around believing in fairy tales” (1:50:34) と表現する。エリックの言う“fairy tale”とはまさに「理想化されたアフリカ」なのであった。しかし、それは空想あるいは幻想のアフリカ、「理想化されたワカンダ」に過ぎなかった。そしてエリックは現実のワカンダに帰属意識を見出すこともできず、次の言葉“Just burry me in the ocean… with my ancestors that jumped from the ships, ‘cause they knew death was better than bondage” (1:57:58) と言い残して息を引き取る。この台詞は、アフリカ大陸から英領植民地アメリカに初めて奴隷が連れてこられたとされる1619年から現在まで続く、アフリカ系アメリカ人の苦難の歴史を引き継ぐ者、またその歴史を知る者の心に強く響くのである¹²。Amiri Barakaの詩の一節“*At the bottom of the Atlantic Ocean there’s a / railroad made of human bones*” (qtd. Cobb) をも想起させる。従来のスーパーヒーロー映画における悪役の死とは異なる感慨を観る者に与える。しかしながら、この結末は、結局アフリカ系アメリカ人は死をもってしか自由になれないという、まさにエリックが口にした奴隷として連行された祖先と同じ結末になり、大西洋奴隷貿易が生み出した悲劇の歴史の延長線上に生きるアフリカ系アメリカ人にとっては救いのない物語ともなってしまう。

ブラック・ディアスポラの思想を内包し、パン・アフリカの未来を志向したエリックの精神は、彼自身によって実現されることはなく、ワカンダの王ティチャラによって引き継がれることになる。国連を思わせる国際会議の場でティチャラはこれまでの孤立主義を改め、国際社会に寄与していくことを宣言し、次のように述べる。“[T]he illusions of division threaten our very existence. We all know the truth. More connects us than separates us. But in time of crisis … the wise build bridges … while the foolish build barriers.” (2:06:03) この台詞は明らかに現アメリカ大統領であるトランプに対する揶揄であることは間違いないであろう。人種間の対立や分断、経済格差の問題など、今日のアメリカが抱える問題を想起させ、それらを乗り越え新しい未来を創造しようと表明するのである。ただし、その表明する主体はあくまで想像のアフリカの一国ワカ

ンダの国王であり、現実のアフリカ系アメリカ人ではないことに、未来を志向するアフロフューチャリズムを見ることはできない。

映画『ブラックパンサー』は、Marvel Cinematic Universeの一大娯楽超大作でありながら、白人主流社会において周縁化を余儀なくされてきたアフリカ系アメリカ人のアフロフューチャリズムを取り入れ、現実のアフリカを植民地化してきたコロニアリズムを批判する。しかし、その一方でアフリカ大陸に対するステレオタイプ的な眼差しを再生産し、アメリカにおける白人至上主義的な人種表象を内面化している点で、非常に両義的な作品であると結論付けられる。その両義性はアフリカ系アメリカ人の二重意識の問題、アフリカ系(黒人)であり、アメリカ人であるといった引き裂かれるアイデンティティを映し出している。本映画には、21世紀の初頭においても、大西洋奴隷貿易や奴隷制度という人間としての尊厳を否定される体験を歴史的かつ集団的記憶として今もなお維持するアフリカ系アメリカ人の引き裂かれた二重意識、そしてその心の内奥にある“sorrow”(哀しみ)を見ることもできる。

注

- 1 例えばダグラスはアメリカ黒人のアフリカ移住に関して次のように述べている。“Individuals emigrate—nations never. We have grown up with this republic, and I see nothing in her character, or even in the character of the American people as yet, which compels the belief that we must leave the United States” (217).
- 2 その結果、人工的に建国されたのが現在のリベリア共和国にあたる。
- 3 本作はマーベル映画史上最大のヒットを記録し、北米での興行収入は7億ドル超、全米映画史上3位となった(てらさわ204)。
- 4 現代コミック史上初の黒人編集者で自身も90年代にブラックパンサーの脚本に携わった経験のあるChristopher Priestは“With due respect to Mr. Coates, that [Ta-Nehisi Coates to write *The Black Panther*] really didn't impress me. If you want to impress me, hire this brilliant young writer Coates to write *Superman*”と述べ、人種やジェンダーに基づいて仕事を依頼することそのものに疑義を呈している(Howard 239)。
- 5 *Fantastic Four #53*, Aug. 1966. Scripted by Stan Lee, illustrated by Jack Kirby.
- 6 メディアにおいてしばしば『ブラックパンサー』が「初の黒人スーパーヒーロー映画」と言及されることがあるが、黒人スーパーヒーローを扱った作品は『ブラックパンサー』以前にも存在する。例えば、*Meteor Man* (1993), *Blank Man* (1994), *Blade* (1998), *Hancock* (2008) 等が挙げられる。
- 7 このようにアフリカ系アメリカ人の歴史的背景を振り返ってみると、hyperrealityの観点から見たアフロフューチャリズムの萌芽は、奴隷制時代のslave narratives(奴隷体験記)にまで遡ることができる(Lavender 12, 83)。よりSF的な文学作品であれば、例えばW. E. B. Du Boisの*Dark Water* (1920) 収載の短編小説“The Comet”, アフリカ系アメリカ人の最も著名なSF作家Samuel R. Delanyの作品群、Octavia Butlerの*Kindred* (1979), Derrick Bellの*Faces at the Bottom of the Well* (1992) 収載の“The Space Traders”, タナハシ・コーツ初の小説*The Water Dancer* (2019) などが挙げられよう。アフロフューチャリズムに関してのより詳細な議論についてはLavenderおよびWomack参照。
- 8 ハリウッド映画における黒人女性表象は、Mammy(乳母)や家政婦、“tragic mulatta”などのステレオタイプ以外にも、Blaxploitation映画に登場する性的魅力を誇張したセクシーな黒人女性などが挙げられる。特に黒人女性が性的に放逸であるという言説は、奴隷制時代から白人男性が彼女らを性的に搾取するための口実として機能してきた歴史的背景も存在する。
- 9 コサ語は実際には南アフリカ共和国の公用語の一つである。ワカンダの5つの「部族」のうち、他の4「部族」に対して距離を置いているJabari(ジャバリ族)を際立たせるためか、彼らのみIbo(イボ語)を話すという設定になっているものの、コサ語を架空の国ワカンダの公用語とすること自体、アフリ

カにおける文化の多様性を平板化する可能性を含むものであろう。この点に関しては次節で論じる。

- 10 ベネットは、本記事の注に次のような但し書きを挙げている。“*While Africa is a continent full of differing traditions, languages, socio-economic classes, etc., for the purpose of comparison to the fictional kingdom of Wakanda, I am referring to the continent as a whole*” (Bennet’s emphases). しかしながら本文で彼女が言及しているアフリカは架空のワカンダではなく、現実のアフリカであり、対比させている対象も現実のアフリカ系アメリカ人が抱える歴史的な事実である。
- 11 近年アメリカでは、アフリカ系アメリカ人やアジア系アメリカ人のアイデンティティを語る際に “people that look like me” という表現を用いることがしばしば見受けられる。Ghana出身で著名な哲学者 Kwame Anthony Appiah は、この “people that look like me” という言葉に注目し、アイデンティティの根幹を成すのがまるで人の見た目、すなわち肌の色をはじめとする身体的特徴であるかのような言説に疑問を呈している。しかしながら、人種プロファイリングによる黒人の不当逮捕や白人警察官による銃撃など、まさに肌の色で判断される現実が今日のアメリカにおいて問題になっていることは事実であり、本来は社会的構築物であるはずの「人種」といった概念が実体を持ち、人々の人生を左右する現実が厳然と存在する。
- 12 本映画においてエリックのみが、エリック、キルモンガー、ウンジャタカと複数の名前を持つ点もまた、彼の二重意識を象徴していると言えよう。実際、クーグラー監督はDVDのボーナスコンテンツとして収録されている「監督とプロダクションデザイナーによる音声解説」において、エリックに多くの名を持たせたのは、アフリカ系アメリカ人の呼称が “African”, “Slave”, “Negro”, “Black”, “African American” と、変化していった歴史を投影させているからだとして述べている。

引用文献

- Appiah, Kwame Anthony. “What does it mean to ‘look like me’?” *The New York Times*, International Edition, Sep. 24, 2019, pp.12-13.
- Bennett, Jessica. “How ‘Black Panther’ Dissects Tension Between Africans & African-Americans.” *Ebony*, February 17, 2018. <https://www.ebony.com/entertainment/black-panther-tensions-africans-americans/>
- Black Panther*. Ryan Coogler, director. Walt Disney Japan, 2018.
- Cobb, Jelani. “‘Black Panther’ and the Invention of ‘Africa.’” *The New Yorker*, February 18, 2018. <https://www.newyorker.com/news/daily-comment/black-panther-and-the-invention-of-africa>
- Douglass, Frederick. *Frederick Douglass: Selected Speeches and Writings*. Ed. Philip S. Foner. Lawrence Hill, 1999.
- Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. 1903. Penguin, 1996.
- Fantastic Four Epic Collection: The Mystery of the Black Panther*. vol. 4, 1966-1967. Scripted by Stan Lee, illustrated by Jack Kirby. Marvel, 2019.
- Gathara, Patrick. “‘Black Panther’ Offers a Regressive, Neocolonial Vision of Africa.” *The Washington Post*, February 26, 2018. <https://www.washingtonpost.com/news/global-opinions/wp/2018/02/26/black-panther-offers-a-regressive-neocolonial-vision-of-africa/>
- Howard, Sheena C. *Encyclopedia of Black Comics*. Fulcrum, 2017.
- Kagwanja, Peter. “Black Panther’s Afro-Optimism Can Tame Scramble for Africa.” *The Daily Nation*, Kenya. April 8, 2018. <https://www.nation.co.ke/oped/opinion/Black-Panther-s-Afro-optimism-and-scramble-for-Africa/440808-4376760-vsfsstuz/index.html>
- Lavender, Isiah, III. *Afrofuturism Rising: The Literary Prehistory of a Movement*. Ohio State UP, 2019.
- Lebron, Christopher. “‘Black Panther’ Is Not the Movie We Deserve.” *Boston Review*, February 17, 2018. <http://bostonreview.net/race/christopher-lebron-black-panther>
- Marshall, Jefferson. “The Role of Colonialism in Marvel’s Black Panther: An Essay.” *Finesse Sports & Entertainment*, March 3, 2019. <https://finessesports.net/2019/03/03/the-role-of-colonialism-in-marvels-black-panther-an-essay/>

- Wallace, Carvell. “Why ‘Black Panther’ Is a Defining Moment for Black America.” *The New York Times Magazine*, February 12, 2018. <https://www.nytimes.com/2018/02/12/magazine/why-black-panther-is-a-defining-moment-for-black-america.html>
- Womack, Ytasha L. *Afrofuturism: The World of Black Sci-Fi and Fantasy Culture*. Chicago Review P, 2013.
- Wright, Laura. “‘Go Back to Africa’: Afrocentrism, the 2016 NFL Protests, and Ryan Coogler’s 2018 Black Panther.” *Postcolonial Interventions*, vol. 4, iss. 1, 2019, pp. 45-72.
https://www.academia.edu/38263575/_Go_Back_to_Africa_Afrocentrism_the_2016_NFL_Protests_and_Ryan_Coogler_s_2018_Black_Panther?auto=download
- Zezeza, Paul Tiyemba. “Black Panther and the Persistence of the Colonial Gaze.” USIU-Africa. April 4, 2018. <https://medium.com/@USIUAfrica/black-panther-and-the-persistence-of-the-colonial-gaze-6c093fa4156d>
- 梶原克教. 「フィクションと歴史記述——『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』試論」『エスニック研究のフロンティア』多民族研究学会編, 金星堂, 2014, pp. 327-37.
- てらさわホーク. 『マーベル映画究極批評——アベンジャーズはいかにして世界を征服したのか?』イースト・プレス, 2019.